

# 道草こそ 私の人生の哲学

別府大学文学部長  
飯沼 賢司

今から10年前、2009年の『教職への道』に「教職と私」という一文を書かかせていただいた。そのとき、私が別府大学の教員となるまでの人生のジグザグ道について触れた。私の人生の道程は、人から見れば、実に挫折と無駄の多い道草人生ともいえる。大学受験に挫折し浪人生活を送り漸く大学に入り、大学時代は、バイトとサークルに明け暮れた生活であった。卒業時にめざした教職に再び挫折し、大学院に進んだものの、博士課程前期、後期と合わせて7年も在籍し、漸く30歳過ぎに早稲田大学文学部助手となった。その間、職もなく結婚をし、生活のために様々なアルバイトを行った。塾教師、高校の非常勤講師、予備校講師、出版社の校閲、毎日違う職場に通っていた。1987年、大分県の博物館に就職し、1993年、現在の職に就くことになった。

研究者としては多くの無駄な時間をアルバイトに割いたように思われるが、様々な場での教師の経験、角川地名辞典や小学館の辞典の校閲の経験が役に立った。研究の傍ら、学会の委員や事務局員としての学会の運営、会誌の発行に関わったが、ここでも、このアルバイト経験が編集に大いに役立った。教員になってからは、さまざまな場で教えたこと、博物館にいたことが大いに役立つことになった。

昨年完成した「佐藤義詮記念館」の2階に大学史展示室が設置されている。この展示の中に本学史学科の創設者賀川光夫先生のコーナーがあり、そこに先生が61歳のときに描いた絵の回顧録『雲梯先生

行状記』が展示されている。そのあとがきに「私の人生の哲学」という文章があり、その文の結びに「道草こそ人生の哲学である」とある。この言葉がジグザグ人生を歩んだ私の心の琴線に触れた。最近、私はこの言葉を座右の銘としている。一見道草は無駄に見えるが、その経験が人を肥えさせる。多くの経験で新しい考え、新しい人と出会い、それが道草の後の生き方次第でその人の財産となるのである。

教職をめざす学生たちは、教員採用試験に向けてひたすら無駄を省くことで合格を目指す傾向がある。かつて、私の知る史学・文化財学の学生が教職を浪人しながら目指していた。優秀な学生で筆記試験は常に上位の成績をとっており、試験勉強の鬼であったが、最後に残れない。彼に非常勤の教員の仕事を勧めたが、勉強の時間がとれなくなると最初は強く固辞した。それでも、必ず君のためになると説得して、ある私立学校の非常勤の教職に就かせた。その翌年、彼は見事に教職の夢を実現させたのである。試験には無駄だと思った時間と経験が彼を確実に成長させたと本人が後に語ってくれた。

今の学生は、必要最低限の挑戦しかしない傾向がある。無駄な道草はしない。しかし、教師は人を教える職業である。教師だからこそ、失敗や無駄の大切さを語る人になってほしい。大学時代、嫌なこと、一見無駄だと思う事に是非挑戦してほしいと思う。賀川先生も私もその無駄と思える回り道、道草こそ、人生の宝となると思っていたのである。